

# 奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶に係る史跡 (8) —「村是」に見られる奈良市域の茶業動向—

## About the Tea-related Historical Sites Existing near Nara Saho College. Part 8—Change of Tea Industry in Nara City, Looking from Rural Planning “Son-ze”—

寺田 孝重                      島村 知歩  
TERADA Takashige              SHIMAMURA Chiho

キーワード:茶産地, 茶業, 奈良市, 村是

Key Words: Tea Origin, Tea Industry, Nara City, Son-Ze

### 1. はじめに

奈良佐保短期大学(以下、本学とする)が位置する奈良市地域は、日本の文化発祥地であり、文化遺跡が多数存在していることは、周知の事実であり、茶に関する文化も例外ではない。その中であって、前々報(第6報)<sup>1)</sup>、前報(第7報)<sup>2)</sup>では特に茶の生産に関連した史跡を紹介してきた。本報では、明治中期～大正期に農業振興政策として実施された「村是」作成運動の奈良県における分布と茶業への影響について、本学に近在している地域を対象に紹介する。

### 2. 紹介

#### 2-1「村是」について

「村是」と言う言葉は聞きなれないものかもしれないが、明治20年代から大正期にかけて行われた産業(農業)振興を図るための地域計画立案運動によって編集されたもので、郡域を対象とした「郡是」や町村域の「町是」「村是」があり、最終的には「県是」から「国是」を目標としたものであった。

この運動は、祖田修の『前田正名(人物叢書)』<sup>3)</sup>や宮地英敏の「初期農商務省の政策対立」<sup>4)</sup>によると、農商務省の官僚であった前田正名<sup>まさな</sup>注<sup>1)</sup>が明治17(1884)年に提出した『興業意見』<sup>注<sup>2)</sup></sup>に始まっている。前田はその後農商務省次官にまでなるが、農本主義的な彼の思考は重工業主義であった政府には受け入れられず、次官を辞任している。しかし、村落を中心とした「気候」「土質」「水利」「経済」などを現時点で分析記録し、これをベースとして地域の振興計画を立案するという彼の意見や方策に賛同する地域が、農村部を中心に広がりを見せており、祖田修の「町村是運動の展開とその系譜」<sup>5)</sup>によれば、大正8(1919)年の時点で、全国1200の地域で町村是が策定されており、村是や郡是の嚆矢とされる福岡県や後述する奈良県の「北倭村是」と同様に前田正名が模範例とした愛媛県余土村の事例などが著名である。

また、「郡是」の言葉を現在に残しているものにアパレル事業を展開している「ゲンゼ株式会社」がある。これは、会社の創設者である波多野鶴吉が、前田の運動に共感し、当時の代表的な農村工業であった蚕糸業を京都府何鹿郡綾部町(現、綾部市)で起こした際、社名を「郡是製絲株式会社」とし、社名として現在も連綿として引き継がれたものとなっている<sup>6)</sup>。

次に奈良県において、この運動に参加した村落の中で「村是」が現存するものの中から、奈良市内で「茶業」に言及しているものについて紹介を行いたい。

#### 2-2 奈良県に残存する「村是」について

別表1は、第6報で示した別表「現在の奈良市に含まれる地域における1881年以前の茶産地の動向」に奈良県内に残っている「村是」の分布を加えたものである。「村是」の多くは第1編現況之部、第2編将来調査之部で構成されており、『平群村是』<sup>7)</sup>のように第3

編として名勝旧跡調査之部が入るところもある。第1編、第2編は収穫量などのデータと文章で作成されており、この中に茶業に関する記述が両編において分析されているものを「◎詳細に分析」、本文中に記述があるものを「◎本文で言及」、データに数値があるだけのものを「○資料のみ」と分類して示した。今回の調査資料点数は、郡是（宇陀郡是）1点、村是については添上・添下・平群郡で17ヶ村分がある<sup>注3)</sup>。

この中では、添下郡と平群郡が合併してできた生駒郡が大半を占めている。さらに、明治38（1905）年に刊行された生駒郡の「北倭村是」には、運動の創設者である、前田正名が「北倭村是調査書序」として序文を寄せ、「今や全国八所ノ模範地ノ一撰定サレシ名誉アル奈良縣生駒郡北倭村ノ村是調査ハ（中略）正名ノ歎喜何物カ之ニ如カンヤ（後略）」<sup>8)</sup>とその取り組みを称賛している他、明治43年（第2版）、大正元年（第3版）と2回も版を重ねており、北倭村がこの事業に力を入れていたことがわかる。

現在の奈良市域としては、狭川、田原、月ヶ瀬、富雄、伏見、平城の6ヶ村分が存在している。この中には、奈良県の中心的な茶業地域として、前々報（第6報）<sup>1)</sup>で紹介した月ヶ瀬村や田原村、さらに、現在は茶業が見られないが、この両村に匹敵する茶産地であった狭川村や平城村などが存在している。

次章では、現存する村是のなかに茶業に関することがどのように言及されているか資料別に紹介する。

### 3. 「村是」における茶業の位置

#### 3-1 茶業が現在も継続する地域

##### (1) 月ヶ瀬村

月ヶ瀬地域は第6報<sup>1)</sup>で紹介した通り、江戸期から現在まで茶業が地域の主産業になっている。「村是」においても、本文冒頭で最も重要な物産として位置付けている。次いで関係する戸数、雇用人数、生産量、産額、の資料の他、生産器具には、茶蒸機、茶粗揉機にかかる管理費用、製造雇用費用が述べられている。また、1年間にわたる村内の作業量や茶業の興隆、指導や製茶組合、共同製茶場、個人工場の機械化にも言及している。そして、「茶園並ニ茶製造ノ改良」という項目を立て、茶園の土壤改良、摘採改良、剪枝改良、施肥や共同製茶組合設置、共同製茶場設置、品評会の開催などが記されており、これにより茶業の近代化に大きな関心が寄せられていたことがわかる。

##### (2) 田原村

田原地域も第6報で紹介した通り、室町、江戸期を経て現在に至るまで、茶の主要な産地となっている。「村是」においては、主要物産の中で、農産物としては米麦に次いで茶、番茶、泥粉（製茶工場や茶精製過程でできる粉状の茶）の生産量が挙げられている。資料には茶業にかかる戸口、茶小屋数、共同製茶工場数、生産量の他、茶業従事戸数を玉露、煎茶、番茶、泥粉に区分している。農機具には焙爐、茶蒸機、粗揉機、揉捻機、中揉機の台数が、雇用には製茶雇用人数や大字別の雇用工数が記録されている。



図1 狭川村付近<sup>注4)</sup>



図2 平城村付近<sup>注4)</sup>

## 3-2 明治前期には茶生産が認められるが、現在は茶業がほとんど継続しない地域

## (1) 狭川村

狭川村は、現在の奈良市の北端になり、京都府の笠置町や木津川市加茂町と境を接する場所(図1)にあった村で、今も茶業の盛んな柳生地区の西側となる。「村是」<sup>9)</sup>においても本文中に製茶の項目を立て、生産量については、煎茶、番茶、煎茶粉別に集計している。また、共同製茶組合の育成による機械化にも言及があり、茶蒸機や茶捻機の保有台数にもそれが表れている。しかし、今後の改良点の中では、桑園・養蚕が項目化されるのに対して、茶業への言及はなく、この時点で、養蚕業に転向したと思われる。

## (2) 平城村

平城村は、押熊村、中山村、山陵村、秋篠村、歌姫村が合併してできた村(図2)で、押熊村や秋篠村に当たる丘陵地域では、江戸期から明治期にかけて茶業が行われていた。「村是」の中では特用作物として言及し、「本村副業ノ主ナルモノハ製茶、養蚕、機織、藁細工…就中製茶ハ甚ダ隆盛ニシテ年々四千余貫ノ産額アリ」<sup>10)</sup>と副業の主たるものとして製茶業があげられている。資料の中では、「煎茶芽」「番茶芽」の生産量が述べられ、副業として139戸が煎茶・番茶の製造を行っている。また、農具としてやはり139点の製茶具が記載されるが、月ヶ瀬・田原・狭川のような機械化はなされていない。

## (3) 富雄村

富雄村は、二名村、三碓村、中村、大和田村、石木村が合併してできた村(図3)で、富雄川沿いの丘陵地では江戸期より明治期にかけて茶生産の認められる地域である。

「村是」においては、本文の農業に「桑茶等ノ特用作物亦少ナカラズ」<sup>11)</sup>と記載され、副業の項では「製茶ハ五十三戸有リテ此等製品ハ殆ンド賣却セラル」<sup>12)</sup>と表現される。資料には「茶上」「茶下」や「玉露、煎茶、番茶」の項があるが、それ以上の分析はなされていない。

## 3-3「村是」としては、資料にのみ茶が現れる地域

## (1) 伏見村

伏見村は、宝来村、平松村、菅原村、疋田村、青野村、西大寺村が合併してできた地域(図4)で、第3報<sup>13)</sup>で紹介したように、西大寺の僧侶叡尊の活躍などにより、中世には茶業の中心的存在であり、江戸期を通じて茶の生産が認められたところであるが、「村是」の中では、数字的資料に「上茶」「下茶」の生産が述べられるのみであり、この時点で農産物として重要視されていなくなっていることが伺われる。

図3 富雄村付近<sup>注4)</sup>図4 伏見村付近<sup>注4)</sup>



図5 北倭村付近<sup>注4)</sup>

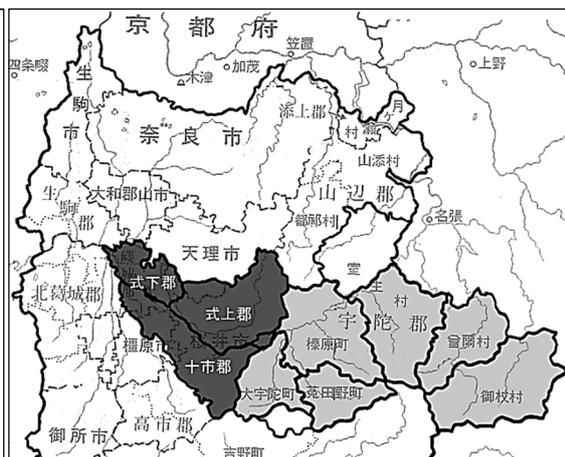


図6 明治29年の宇陀郡と磯城郡<sup>注5)</sup>

### 3-4 その他

本項では、奈良市域ではないが、茶業やこれに関連した項目を掲載している例を挙げておきたい。

#### (1) 北倭村<sup>きたやま</sup>

北倭村は、前述のように、前田正名が「村是」の好例として序文を寄せている。富雄川の上流部にあたり、奈良市富雄地区に隣接し、現在は生駒市高山地域に当たる丘陵地である(図5)。江戸期から茶業も見られるが、村是には「製茶ハ明治五年以来逐年増加シタルモ明治二十年ノ頃ヨリ毎年減退シ茶園ト桑園ト変化スルノ傾向アリ」<sup>14)</sup>と記され、年々養蚕業に移行しつつあることがうかがえる。茶関係としては他に、この地は茶筌<sup>ちやせん</sup>をはじめとした竹製品の製造が盛んであり、村是の中でも「茶筌ノ起源沿革及現況」の項を立て、詳しい分析と各流派の使用茶筌にまで言及している。

#### (2) 宇陀郡：「宇陀郡是」、<sup>みつえ</sup>「宇陀郡治一斑」及び磯城郡：「磯城郡産業是」

現在の宇陀郡は御杖村、曾爾村のみとなっているが、当時は、その2村に加えて、平成18(2006)年に宇陀市となった大宇陀町、菟田野町、榛原町、室生村地域が含まれていた(図6)。現在の奈良市域に隣接するこの地域では、茶の生産が行われていた。

「奈良県宇陀郡是」は大正7(1918)年に刊行されており、副業の項に「(7)茶樹ノ栽培」の項目がある。その中には「明治四十一年栽培反別九十五町兆此生産額煎茶七千二百十八貫 番茶四千珀四十四貫 ナリシガ 大正六年ニ至リ栽植反別五十八町七反歩ニ減ジタリ」<sup>15)</sup>「辛ウジテ郡内ノ需要ヲ充シ得ルノ程度」<sup>15)</sup>と茶の栽培が年々減少していることがわかる。しかし「現在ノ面積ヲ維持シ更ニ栽培管理ノ方法ヲ改善シ収葉量ノ増加ヲ図リ一面製茶ノ方法ヲ改メ品種ヲ向上シ 自給自足策ヲ講セシメ郡外ヨリノ移入防止ニ努メントス」<sup>15)</sup>と結ばれており、茶業を重要な産業として位置づけられていることがわかる。

また、現存する奈良県の「郡是」に当たるものとして、『奈良縣宇陀郡治一斑』<sup>注6)</sup>がある。これは、前述の「奈良県宇陀郡是」よりさらに古く、明治27(1894)年時点での調査を明治29(1896)年に刊行したもので、目次から見て各種「村是」の採る項目と一致しており「郡是」と考えてよいと思われる。この中で茶業は、農業の項目に「第三十二 茶畑及桑畑段別」として「茶畑段別 百六十九町七反歩 園圃邱地帯茶樹見積反別六十一町三反歩」<sup>16)</sup>、「第三十四 製茶及繭生絲産額」として「製茶 五千七百八十三貫」<sup>17)</sup>の生産量があげられ、宇陀郡における当時の茶業の状況が判明している。

さらに、刊本ではないが『磯城郡産業是』<sup>注7)</sup>がある。これは明治43(1910)年編纂で、清書本と思われる。磯城郡は、明治29(1896)年に式上、式下、十市の3郡が合併したもので、現在では田原本町、川西町、三宅町からなっている。この中では、上之郷、織田、纏向、川東の各村で茶業収入が記録され、特に纏向村での茶業実態が記述されるが、「将来ノ部」においては、ほとんど触れられていない。

#### 4. おわりに

現在の地域産業が、確立していった明治中期において、農業もその基盤が定まっていたと考えられる。このような時期に、地域産業の振興政策について、影響のあった「村是策定運動」については、あまり語られなくなっている。しかし、奈良市の茶業に関してみても、この影響下で現在の近代化茶業が準備されていることは、月ヶ瀬・田原村是に表れている。また、逆に茶生産が行われていたものの、近代化を目指して資本投下を考えたとき、茶業から養蚕・製糸に舵を切った地域も当然現れ、それ以後の地域特性を形成していったことが「村是」からわかった。

#### 注釈

注 1) 嘉永 3 (1850) 年 3 月 12 日-大正 10 (1921) 年 8 月 11 日。父は鹿兒島藩士で漢方医の前田善安。慶応元 (1865) 年に長崎へ藩費留学して「語学塾」で学び、『和訳英辞典』(『薩摩辞書』) を高橋新吉及び兄の献吉とともに発行した。明治 2 (1869) 年にフランスに留学し、明治 8 (1875) 年二等書記生としてフランス公使館に勤務した。帰国後、明治 11 (1878) 年に仏国博覧会事務官長となる。明治 17 (1884) 年『興業意見』を著し、殖産興業に努めた。明治 21 (1888) 年に山梨県知事、22 年農商務省工務局長、23 年農商務省次官を歴任するも、同年陸奥宗光農商務相と対立して下野した。その後、明治 25 (1892) 年『所見』を刊行し、新たな地方産業振興運動に乗り出し、全国行脚を開始した。翌年に雑誌『産業』を創刊し、直輸出促進と在来産業の実業団体(五二会、茶業会、蚕糸業会その他)結成に奔走し「布衣(無位無官という意味)の農相」と評された。明治 30 (1897) 年運動の指導者の立場を退いたため、彼の影響力は弱まり、運動も衰退した。

注 2) 明治 17 (1884) 年に 3 年かけて農商務省大書記官であった前田正名が中心になって編纂した和綴 30 巻にもおよぶ文書であり、殖産興業政策の展開過程での産業の実態を調査・検討し、合わせて意見が添えられている。同書は経済史研究の基本文献として農山漁村文化協会から『興業意見・所見(明治大正農政経済名著集)』として昭和 51 (1976) 年に復刻、刊行されたものをみることができる。なお、第 2 報で紹介した岡田亀久郎顕彰碑の碑文は前田正名が揮毫したものであり、奈良の茶業振興に正名が密接にかかわっていたことを示している。

注 3) 今回調査した奈良県内の 17 ヶ所分の村是等は、奈良県図書館で郷土資料として収集されている。また、「国立国会図書館デジタルコレクション」に奈良県内のものとしては「平城村是」「平群村是」「片桐村是」「本多村是」「三郷村是」「宇陀郡是」が電子公開されており、郷土研究の重要な資料となっている。

注 4) 地図は『歴史的行政区域データセットβ版』をもとに地名や駅名など位置関係がわかるように加工した。『歴史的行政区域データセットβ版』は ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センターが提供しているデータセット「Geoshape リポジトリ」内で公開されているもので、明治 35 (1920) 年以降の市区町村境界の歴史の変遷を中心としたデータセットである。昔の市区町村境界を現在のウェブ地図上に可視化することができる。地図は「地理院タイル <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>」をもとに制作されたものである。

注 5) 地図は、『奈良県の地名(日本歴史地名大系 30)』の「奈良県(旧郡域・現郡市域対照図)」<sup>18)</sup>をもとに作成した。明治 29 (1896) 年の磯城郡は、城島村、初瀬村、朝倉村、上之郷村、三輪村、織田村、纏向村からなる式上郡と、川西村、三宅村、都村、川東村からなる式下郡、平野村、多村、桜井村、大福村、香久山村、安倍村、多武峯村、耳成村、田原本町にまたがった十市郡の 3 郡が合併してできた。宇陀郡は、室生村(当時の三本松村、室生村)、菟田野町(当時の宇太村、宇賀志村)、大宇陀町(松山村、神戸村、政始村)、榛原町(内牧村、伊那佐村、榛原村)と曾爾村、御杖村が合併してできた。

注 6) 『奈良縣宇陀郡治一斑』は、奈良県立図書館が寄贈を受けた「大和国宇陀郡稲戸村薄木家文書」の近世・近代文書 218 点に含まれ、「まほろばデジタルライブラリー」として電子公開されている。<http://meta01.library.pref.nara.jp/opac/repository/repo/109956/?lang=0&mode=&opkey=&upmetapid=109612&cid=18&codeno=#?c=0&m=0&s=0&cv=3&r=0>

&xywh=748%2C531%2C923%2C666

注 7) 『磯城郡産業是』は、奈良県立図書館の「まほろばデジタルライブラリー」に「磯城郡役所文書」と分類され電子公開されている。本資料が刊行されたかは不明で、先学のご教示を頂きたい。 [http://meta01.library.pref.nara.jp/opac/repository/repo/8308/?lang=0&mode=0&opkey=R157440861861545&idx=13&chk\\_schema=100&cate\\_schema=100#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-139%2C-122%2C2764%2C1994](http://meta01.library.pref.nara.jp/opac/repository/repo/8308/?lang=0&mode=0&opkey=R157440861861545&idx=13&chk_schema=100&cate_schema=100#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-139%2C-122%2C2764%2C1994)

## 引用・参考文献

- 1) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶に関する史跡（6）：奈良市に存在する茶産地：田原地域，月ヶ瀬地域」、『奈良佐保短期大学研究紀要』，25，pp.49-56（2018）
- 2) 寺田孝重，島村 知歩：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶に関する史跡（7）：奈良市域に存在する茶産地：東市・帯解地域」、『奈良佐保短期大学研究紀要』，26，pp.25-39（2019）
- 3) 祖田修著，日本歴史学会編：『前田正名（人物叢書 165）』，吉川弘文館（1973）
- 4) 宮地英敏：「初期農商務省の政策対立」、『歴史と経済』，46（3），pp.38-51（2004）
- 5) 祖田修：「町村是運動の展開とその系譜」、『農林業問題研究』，7（1），pp.14-24（1971）
- 6) グンゼ株式会社：「グンゼのあゆみ」，<https://www.gunze.co.jp/special/history/ayumi/>（2019.11.30）
- 7) 奈良県生駒郡農会：『奈良県生駒郡平群村是. 明治 41 年 12 月調査』，奈良県生駒郡農会（1912）
- 8) 有山正文編：『奈良縣生駒郡北倭村是』，北倭村農會，序文（1905）
- 9) 奈良縣生駒郡農會編：『奈良縣生駒郡伏見村是』，奈良縣生駒郡農會（1908）
- 10) 奈良縣生駒郡農會：『奈良縣生駒郡平城村是. 明治 41 年 9 月調査』，p.2（1912），<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/911072>（2019.11.30）
- 11) 奈良縣生駒郡農會編：『奈良縣生駒郡富雄村是』，奈良縣生駒郡農會，p.5（1908）
- 12) 11) と同書，p.6
- 13) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について（3）：西大寺，元興寺，称名寺」、『奈良佐保短期大学研究紀要』，22，pp.37-42（2014）
- 14) 有山正文編：『奈良縣生駒郡北倭村是』，北倭村農會，p.16（1905）
- 15) 奈良縣宇陀郡役所編：『奈良縣宇陀郡是』，奈良縣宇陀郡役所，pp.45-46（1918），<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/957942>（2019.11.30）
- 16) 奈良縣宇陀郡役所：『第一次奈良縣宇陀郡治一斑 全』，p.20（1896）
- 17) 16) と同書，p.22
- 18) 国立国会図書館：「前田正名：近代日本人の肖像」，<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/430.html>（2019.11.30）
- 20) 人文学オープンデータ共同利用センター：『歴史的行政区域データセットβ版』，（CODH 作成），<http://geoshape.ex.nii.ac.jp/city/>（2019.11.30）
- 21) 平凡社編：「奈良県（旧郡域・現郡市域対照図）」、『奈良県の地名（日本歴史地名大系 第 30 卷）』，平凡社，口絵（1981）
- 22) 垣内寛嗣編：「奈良縣添上郡狭川村是」，奈良縣添上郡狭川村（1921）
- 23) 奈良縣生駒郡農會編：「奈良縣生駒郡本多村是」，奈良縣生駒郡農會（1912）
- 24) 川井景一選編：『大和国町村誌集』，（1891），<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/993077>（2019.11.30）

別表1 奈良県における「村是」の残存分布と茶業の動向

郡名	村是の存在村	大字名※1	大和国 町村誌集※2	寛永 国郷帳※3	現市町村	村是発刊年	茶に関する記述 ※4
添上	狭川村	広岡	400 斤		奈良市	大正 10 年	◎詳細に分析
		下狭川	5000 斤				
		西	500 斤				
		両					
	田原村	東	340 斤		奈良市	大正 6 年	◎詳細に分析
		沓掛	670 貫				
		日笠	3,000 斤				
		此瀬	3,781 斤				
		須山	3,500 斤				
		警多林	2,755 斤	茶年貢			
		和田	5,000 斤				
		横田	2,800 斤				
		中之庄	5,562 斤				
		大野	1,250 斤				
		中貫	470 斤				
月瀬村	杣川	1,560 斤		奈良市	大正 8 年	◎詳細に分析	
	南田原	1,350 斤					
	茗荷	1,340 貫					
	矢田原	5,768、5 貫					
	長谷	1,500 斤					
添下 (生駒)	富雄村	桃香野	7,500 斤		奈良市	明治 41 年	◎本文で言及
		月瀬	5,000 斤				
		長引	9,030 斤				
		石打	8,960 斤				
	伏見村	尾山	8,415 斤		奈良市	明治 41 年	○資料のみ
		二名		茶年貢			
		三碓	27 貫	茶年貢			
	平城村	中	120 斤	茶年貢	奈良市	明治 41 年	◎本文で言及
		大和田	130 斤				
		石木	150 斤				
		西大寺	100 貫	茶年貢			
	矢田村	菅原		茶年貢	大和郡山市	明治 41 年	-
		宝来	100 貫				
		平松	250 斤	茶年貢			
		押熊	25 貫	茶年貢			
		中山	200 斤				
		山陵	2,000 斤	茶年貢			
	片桐村	矢田	500 斤		大和郡山市	明治 45 年	○資料のみ
城		500 斤	茶年貢				
外川							
山田			茶年貢				
新		100 斤					
小泉		6,815 斤	茶年貢				
西田中							
万願寺			茶年貢				
本多村	池之内	100 斤	茶年貢	大和郡山市	明治 41 年	-	
	田中		茶年貢				
	小南		茶年貢				
	小林		茶年貢				
	西	53 斤 5 分					
	南井						
	豊浦		茶年貢				
	今国府						
	権木						
	馬司	100 斤					
平群 (生駒)	池沢			大和郡山市	明治 41 年	-	
	長安寺	75 斤					
	柏木						
	額田部村 寺方						
	額田部村 南方						
	額田部村 北方	250 貫					
	西						
八條							
宮堂							

郡名	村是の存在村	大字名※1	大和国 町村誌集※2	寛永 国郷帳※3	現市町村	村是発刊年	茶に関する記述※4
平群 (生駒)	北生駒村	山崎		茶年貢	生駒市	大正1年	—
		谷田		茶年貢			
		俵口		茶年貢			
		小明		茶年貢			
		辻		茶年貢			
	南生駒村	葉畑		茶年貢			
		小瀬					
		乙田					
		小平尾					
		萩原					
		藤尾					
		西畑					
		鬼取					
		大門					
小倉寺							
有里							
壱分							
添下 (生駒)	北倭村	高山	2,000 貫	茶年貢	生駒市	明治38年 明治43年2版 大正1年3版	○資料のみ 茶釜工業記述有
		鹿畑	450 斤	茶年貢			
		上		茶年貢			
		南田原					
平群 (生駒)	法隆寺村	法隆寺			斑鳩町	明治41年	—
		東福寺					
	富郷村	三井	100 斤		斑鳩町	明治41年	—
		幸前					
		高安					
		輿留					
		阿波					
	平群村 (明治村)	西向			平群町	明治45年	◎本文で言及
		櫛原					
		換原					
		上庄					
		梨本					
		吉新					
		三里					
		白石畑					
		平等寺		茶年貢			
		下垣内		茶年貢			
		鳴川		茶年貢			
		福貴	500 斤				
		福貴畑					
		久安寺		茶年貢			
		信貴畑		茶年貢			
	榎原		茶年貢				
	越木塚						
	若井		茶年貢				
	西宮						
	樺井		茶年貢				
	勢野						
	三郷村	立野	7,555 斤	茶年貢	三郷町	明治45年	○資料のみ
		南畑		茶年貢			

※1 江戸期における村名

※2 明治25年刊行

※3 寛永期の国郷帳類における茶年貢

※4 第1編、第2編ではデータと文章で作成されているが、茶業に関する記述が両編において分析されているものを「◎詳細に分析」、本文中に記述があるものを「◎本文で言及」、データに数値があるだけのものを「○資料のみ」と分類した